

『5000 人の給食』

’21/02/07

聖書箇所: マルコの福音書 6 章 30-44 節 (新約 p.76-)

イエス様が歩まれた公生涯…、つまり、神の救い主としての歩みは、約3年間であります。しかし、その内の後半部分(約1年半)を、イエス様は、12 人の弟子たちの訓練を優先されたように思われます。それに対して、前半の部分は、12 人の弟子たちと言うよりも、イエス様の視点は、もっと大多数…、つまり、大勢の民衆たちに、その目が向けられていたように思われます。

命題: イエス様が12弟子たちに期待しておられたことは?

実は今日、私たちが見ていこうとしている聖書のみことばは、そういう転換期に当たります。この時、イエス様は、大勢の群衆たちに、ご自分の力や救いのメッセージを発しつつ…、それと同時に、12 人の弟子たちの訓練もしておられます。…ですから、今日、このメッセージを聞いてくださる皆さんも、そういう視点で、一体、この時、イエス様は、あの 12 弟子たちに何を教え…、どういったことを彼らに期待しておられたのか?ということに注目していただきたいと思えます。

願わくは、今日、このメッセージを聞いてくださった皆さんが、イエス様が、その時弟子たちに伝えようとしておられたことを理解して下さって…、尚且つ、私たちも、当時、弟子たちが学んだのと同じような内容を学ぶことによって、よりキリストに似た者として歩んでいけるよう願います。どうぞ、聖書をお持ちでしたら、マルコ伝 6:30-44 の部分をお開きください。そこには、何と、イエス様が、5000 人も空腹を満たしてくださったという大変な奇蹟が記されてあるだけでなく…、イエス様が一体何者で…、また、私たちが、どういったことを学ぶべきなのか?ということを教えてくれています。

I・自分たちの 限界を知る!(30-37 節)

まず、最初に、今回のみことばから私たちが学ぶべきことは、**私たちは、自分自身の“限界”というものを知らなければならない!**ということにあります。この時のイエス様は、そういうことを、弟子たちに教えるために、今回の、このレッスンを聞いてくださったように私には思われます。どうぞ、まず、今回のみことばの内、30-37 節までを読ませていただきます。そこには、このように記されています。

30 さて、使徒たちは、イエスのもとに集まって来て、自分たちのしたことを残らずイエスに報告した。

31 そこでイエスは彼らに、「さあ、あなたがただけで、寂しい所へ行つて、しばらく休みなさい」と言われた。人々の出入りが多くて、ゆっくり食事する時間さえなかったからである。

32 そこで彼らは、舟に乗って、自分たちだけで寂しい所へ行つた。

33 ところが、多くの人々が、彼らの出て行くのを見、それと気づいて、方々の町々からそこへ徒歩で駆けつけ、彼らよりも先に着いてしまった。

34 イエスは、舟から上がられると、多くの群衆をご覧になった。そして彼らが羊飼いのいない羊のようであるのを深くあわれみ、いろいろと教え始められた。

35 そのうち、もう時刻もおそくなったので、弟子たちはイエスのところに来て言った。「ここはへんぴな所で、もう時刻もおそくなりました。

36 みんなを解散させてください。そして、近くの部落や村に行つて何か食べる物をめいめいで買うようにさせてください。」

37 すると、彼らに答えて言われた。「あなたがたで、あの人たちに何か食べる物を上げなさい。」そこで弟子たちは言った。「私たちが çık かけて行つて、二百デナリものパンを買つてあの人たちに食べさせるように、

ということでしょうか。」

●イエス様がなされた 質問の意図 とは?

今日のみことばの少し前…、マルコ 6:7 で、「イエス様は、12 人の弟子たちを呼んで、彼らを2人ずつ遣わされた…」という話が記されています。ある意味、これも、12 弟子たちの訓練の一環でありました。そういった訓練とも言い得る伝道旅行から帰ってきた弟子たちは、まず、自分たちがなしてきた働きを…、また、当時の人たちの反応などを、残らずイエス様に報告しました…。

そんな弟子たちに、イエス様は、31 節…、休養を取るよう、勧められるわけです。…と言うのも、31 節の後半に書かれてあるように、帰ってきたばかりの弟子たちの周りにも、イエス様を取り巻く群衆たちが居て、弟子たちは、ゆっくりと食事をする時間も無かったからです。また、このみことばには、はっきりと書かれていませんが、恐らく、この時、弟子たちは、初めての伝道旅行…、慣れない訓練のため、肉体的にも、霊的にも疲れ切っていたらと思うられます。

正直、私も、あまり聖書の話をご存知でない…、クリスチャンで無い人たちに、聖書の話をしたり…、伝道をしたりすると疲れます。皆さんも、そうではないでしょうか? (笑)

そこで、弟子たちは舟に乗って、大勢の人がやって来ないよう、寂しい所へ移動します。この場所がガリラヤ湖であったということは、並行箇所のヨハネ伝に記されています。しかし、そこでも、大勢の人たちが集まってしまって、弟子たちだけでなく…、イエス様も、ゆっくりとすることができませんでした。しかし、そこで、イエス様は、いろんなことを教えてくださったと書かれています。

さて、問題は、その後です。…しばらくの時間が経って、もう日も暮れ始めてきました(ルカ 9:12)。そこで、弟子たちは皆を帰らせるよう、イエス様に提案しますが、イエス様は、ある質問と言うか、弟子たちに、こんな提案? 命令をされます。それが 37 節の、『あなたがたで、あの人たちに何か食べる物を上げなさい。』というみことばです。実は、このみことばを原語のギリシヤ語で観察すると、「与える」という単語(δίδωμι)が、(アオリスト)命令形で記されていて…、イエス様が弟子たちに向かって、「あなた方で、この人たちに何か食べ物を与えてやりなさい!」と命じられた! というようなニュアンスで書かれています…。「この人たち」と言っても、今日のみことばの最後 44 節を見てくださったなら分かる通り、当時、そこには、男性だけでおおよそ 5000 人も居たと言うのです。この当時、女性や子どもたちは、あまり人数をカウントしない傾向にありましたから、もし、女性や子どもたちの数もカウントしていたら、7000-8000 以上だったかも知れません。それだけの大人数に…、たった 12 人で、どうやって食事を調達せよと言うのでしょうか?

でも、今日このメッセージを聞いてくださっている方のほとんどすべての方は、この後、イエス様が、その群衆たちのお腹を満たして下さるということをご存知です。もちろん、当のイエス様は、絶対に、そのことを御存知であつたはず。じゃあ、一体なぜ、イエス様は、『あなたがたで、あの人たちに何か食べる物を上げなさい!』なんてことを言われたのでしょうか? …実は、並行記事であるヨハネ 6 章には、こう記されています。『5 イエスは目を上げて、大ぜいの人の群れがご自分のほうに来るのを見て、ピリポに言われた。「どこからパンを買つて来て、この人々に食べさせようか。」6 もっとも、イエスは、ピリポをためしてこう言われたのであつた。イエスは、ご自分では、しようとしていることを知っておられたからである。』(ヨハネ 6:5-6)

⇒皆さん、分かってくださいます? …何と、この時イエス様は、この後、ご自分が神の奇蹟をもって、群衆たちのお腹を満たすことを分かっていながら、あえて、そういうことを弟子のピリポ(たち)を試すために言われたと、このみことばは教えてくれているのです。

でも、一体どうして、イエス様は、5000 人の食事を(突然に)用意しなさい！みたいなことを言われたのでしょうか？…イエス様から、そう命じられた弟子たちは、懸命に考えて、「どうしよう！これだけの人数だと 200 デナリのパンを買ってきても足りないぞ！」と言うわけです。皆さんもご存知のように、200 デナリというのは、200 日分の賃金です。今の文化、貨幣価値で言うと、200 万円ほどかも知れません。言わば、大金です！…もちろん、そんな大金を弟子たちが持っているはずありません…。

私が思いますのは、この時、イエス様は、弟子たちが「自分たちには無理だ…。そんなこと、できっこない！…でも、イエス様なら(できるのでは！)」ということに気付かせるために、イエス様は、あえて、こういった課題？問題？を弟子たちに与えられたのではないのでしょうか？

⇒実は、先読みして申し訳ありませんが、このみことばのすぐ後…、来週、私たちは、こんな出来事から学ぼうとしています。…この後、イエス様を除いて、弟子たちだけで舟に乗ってガリラヤ湖を渡っていた時、そこにイエス様が、まるで幽霊のように、水の上を歩いてこられた、というあのエピソードです…。まあ、詳しいことは来週の礼拝で学ぶとして…、その 52 節に、こんなことが記されています。『というのは、彼らはまだパンのことから悟るところがなく、その心は堅く閉じていたからである。』…。

皆さん、聞いてくださいました？…このみことばは、明確に、弟子たちが、このパンのこと…、つまり、「5000 人の給食」から何か学ぶべきことがあった！ということを教えてくれています。…じゃあ、彼らは、どういったことについて学ぶべきだったのでしょうか？…恐らく、今日のみことばと、来週私たちが学んでいくべきみことばとが共通して教えてくれているレッスンというのは、「イエス様だけを見上げて、イエス様だけを信頼する！」というようなことであろうと思います。実は、そういったようなことを、この時の弟子たちは学ぶべきであったわけで…、そのために、イエス様は、こういった状況を用いられたわけなのです…。

●自分たちには、導き手が必要である！

どうぞ、皆さん、もう1度、今日のみことばの 34 節に、注目してみてください。そのみことばは、どんなことを教えてくれています？⇒『イエスは、舟から上がられると、多くの群衆をご覧になった。そして彼らが羊飼いのいない羊のようであるのを深くあわれみ、いろいろと教え始められた。』とありますでしょ？…この時、イエス様は、まず、弟子たちに休養を与えられました。…というのは、彼ら弟子たちには、休息が必要であったからです！

時々、私たちクリスチャンや、特に、フルタイムの献身者…、つまり、牧師や宣教師たちに休息は必要ない！という極端な考えを持った人たちがおりますが、果たして、本当にそうでしょうか？⇒実は、私は、そうは思っておりません。だから、私は、この教会に遣わされた当初から、基本的には、毎週1日…、できれば、月曜日を公休日としてほしいということをお願いしてきました。だって、天の神様だって、天地創造の後、7日目を休まれたわけでしょ？(笑)

少し話がそれますが、牧師をしていると、なかなか心が休む時が無いと言われることがあります。例えば、皆さんがご存知のように、この教会にかかってくる電話は、昼夜を問わず、すべて私の携帯に転送される設定になっています。…皆さん、それが具体的に、どういうことかイメージできます？…過去、私の携帯には、深夜の2時とか、3時とかに、本来なら教会にかかってくるべき電話が転送されてきたことが何度もあります。…その中の多くは、「ちょっと困ったことがあるので、お話を聞いてもらって良いですか？」という感じで始まって、そのほとんどが、しばらく話を聞いている内に、「だから、お金を貸してほしい！」というような感じでした。

また、私たちの教会の名前が、以前は、「いのちの電話」に近い名前だったこともあって、自殺を考えているような方が、教会に電話してきたり…、あるいは、NTTの番号案内が、そういった電話を教会に…、つまり、私の携帯に転送されたり、なんてことも何度かありました。皆さん、想像できます？…そういった電話が、私の携帯に、いつ、例えば、休みであろうと…、あるいは、バイクを運転しているとき…、あるいは、

家族で、バカンス中であろうと、いつ、どのような時にかかってくるか分からないのです…。正直言って、私も知っているのは、過去、何人も牧師たちが、様々なストレスや困難から…、あるいは、プレッシャーなどに負けて、自殺未遂を起こしたり…、精神的あるいは肉体的な病から牧師を引退してしまっているという事実です。…果たして、私たち牧師に、しっかりとした休みや休息は必要無いのでしょうか？…皆さんは、どう思われます？(苦笑)

とにかく、イエス様は、この時、弟子たちに休息を与えられました。それが、彼らには必要であったからです！でも、イエス様は、その時、弟子たちと同様、休息しようとはされませんでした。…と言うのは、当時、そこに集まって来ていた群衆たちが、まるで、『羊飼いのいない羊のよう』であったからです！そうですよ！…でも、皆さん、「羊飼いのいない羊」って、具体的には、どういう状態なのでしょう？

⇒皆さんもご存知のように、羊という生き物は、外敵が居ても、なかなか自分で自分のことを守れない弱い生き物であります。多くの生き物たちには、襲いかかってくる敵に対して攻撃できる爪や角があったり…、あるいは、危険を察知できるような大きな耳があったり、速い逃げ足があったり、敏感な鼻があったりしますが、羊たちは、そうではありません。また、羊たちがエサを見つけて、食べることに集中してしまうと、それをなかなか止められなかったり、いつの間にか、迷子になってしまうような…、そんな生き物だそうです。つまり、羊たちという生き物は、羊たちだけでは生きていけないのです。羊たちには、彼らの世話をし…、彼らのことを導いてあげるような羊飼いが必要なのです！

それと同じことを、神様からのお言葉である聖書も教えてくれています。私たち人間も、真の造り主である神様のことを忘れて、自分勝手に生きてしまっています。…あのアダムとエバが、初めて罪を犯した時のように、私たちは、誰の制約も受けず…、自分たちだけでやっていきたいのです。そういったことは、つい最近学んだ、あのイスラエルの歴史からも…、また、私たちの経験からも分かります。皆さんだって、そうでしょ？

でも、私が牧師として感じることは…、また、私が多くの方たちにカウンセリングをしてきて思うことは、私たち人間には、私たち人間のことをしっかりと正しく導いてくれるような“導き手”…、つまり、羊飼いのような存在が必要である！ということです。だから、今も、多くの人たちは、多くの宗教や“占い”などに走ってしまう傾向にあるのではないのでしょうか？

私が牧師として働いてきて、早20年以上…、その間、「私は、神様のみこころを求めて…、神様のみことばの通りに歩んできて、今、本当に困っています！」というような方に、ほとんど会ったことがありません。私が会って、話をしてきたのは、そのほとんどが、「神様のみこころが分からない…(あるいは)、神様から離れて、自分の好き勝手に生きてきたけど、もう完全に行き詰ってしまった！もうどうして良いか分からない…」そういった感じです。そして、私が話す結論は、簡単に言いますと、「真の神様のところにしか、本当の満足や解決はありません。どうか、一緒に、神様のみこころを求めて、その神様に従っていきましょう！」という感じです。私たちには、ちゃんとした導き手が…、つまり、真の神様が必要なのです！

皆さんもご存知でしょう。…イエス様は、サタンの誘惑に会われた時、こんな風にお答えになられました、『人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる。』(マタイ 4:4)…。また、イエス様は、まことのぶどうの木^の例えの中で、こうも教えてくださいました。『4 わたしにとどまりなさい。わたしも、あなたがたの中にとどまります。枝がぶどうの木についていなければ、枝だけでは実を結ぶことができません。同様にあなたがたも、わたしにとどまっていなければ、実を結ぶことはできません。5 わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです。6 だれでも、もしわたしにとどまっていなければ、枝のように投げ捨てられて、枯れます。人々はそれを寄せ集めて火に投げ込むので、それは燃えてしまいます。』(ヨハネ 15:4-6)…。

このように、私たち人間には、真の神様という、正しい導き手が必要なのです！ そうったことが分からな
いから、私たち人間は皆、出口の無い迷路をさまよってしまっているのではないのでしょうか？ …でも、どう
か皆さん、考えてみてください！ 果たして、石や木で作られただけの張りぼての神々が、私たちに本当の
解決を…、あるいは、私たちすべての人間が苦しんでいる罪や老い…、あるいは、死からの解決を与え
てくれるものでしょうか！ …いいえ！ 私たちに、本当の解決を与えてくださるのは、この聖書が教える…、
真の神様以外にはおられないのです！

すみません…。今日はもう、かなり時間が遅れてしまっているのですが、もう1つだけ、話を脱線させて
ください…。実は、今日のみことばの 34 節の平行個所なのですが、その同じ内容を、ルカ伝 9 章では、
こう記されてあります。『ところが、多くの群衆がこれを知って、ついて来た。それで、イエスは喜んで彼らを
迎え、神の国のことを話し、また、いやしの必要な人々をおいやしになった。』（ルカ 9:11）つて…。

⇒皆さん、私が何を言いたいのか分かってくださいますか？…以前、私たちは、マルコ伝 1 章や 3 章の
記事¹から、イエス様の持っておられた優先順位や、そのお考えについて学びましたでしょ？…イエス様に
とっての1番の優先事項は、私たちが病気やケガから癒されること…、あるいは、日常の様々な問題から
解放されることではありませんでした。そういったことよりも、イエス様が優先されて…、また、より重きを
置かれたのは、私たちが神の国について学ぶこと…、つまりは、救われることであります。そうでしょ！

これまで私たちが学んできて…、また、何度か確認してきたように、確かに、イエス様は、大勢の者
たちの病やケガを癒し…、また、悪霊たちを追い出してくださいました。しかし、それらは、あくまでも、付け
足しと言うか、2番目3番目の優先事項であって、1番の優先事項ではありませんでした。だから、この
時のイエス様は、喜んで、群衆たちのことを迎え…、神の国の話をされたのです！

II・イエス様には、不可能が無い！（38-44 節）

どうぞ、今度は、今日のみことばの後半部分である、38 節以降をご覧ください。そのみことばは、私
たちに、イエス様には、“不可能”が無い！ということをお教えてくれています。私たちが抱えている様々な
問題…、私たちがどうしてもできないような、ありとあらゆる困難を、イエス様は解決できる！ということ
を、12 弟子たちに、本当の意味で気付かせるために、イエス様は、この機会を用いてくださったのです。ど
うぞ、今日のみことばの後半、38-44 節をご覧ください…。そこには、こうあります。

38 するとイエスは彼らに言われた。「パンはどれぐらいありますか。行って見て来なさい。」彼らは確かめて
言った。「五つです。それと魚が二匹です。」

39 イエスは、みなを、それぞれ組にして青草の上にならわすせよう、弟子たちにお命じになった。

40 そこで人々は、百人、五十人と固まって席に着いた。

41 するとイエスは、五つのパンと二匹の魚を取り、天を見上げて祝福を求め、パンを裂き、人々に配る
ように弟子たちに与えられた。また、二匹の魚もみなに分けられた。

42 人々はみな、食べて満腹した。

43 そして、パン切れを十二のかごにいっぱい取り集め、魚の残りも取り集めた。

44 パンを食べたのは、男が五千人であった。

●この時に、イエス様が起こされた 奇蹟 とは？

先程も言いましたように、この時、イエス様の周りには、「男だけで 5000 人ほど」でありました。…という

ことは、恐らく、そこには、7000-8000 人、ひょっとしたら、1万 人もの人たちが集まっていたのかも知れま
せん。そこで、イエス様は、12 弟子たちに命じて、その群衆を 100 人とか、50 人ほどの組にして座らせま
す。そして、そこにあった、『五つのパンと二匹の魚』を取って、それらを祝福して、群衆に配るよう、弟子
たちに指示します。すると、そこに居たはずの何千人ほどが全員、『食べて満腹した』のです。

良いですか、皆さん！ 5000 人以上の人たちが、たった5つのパンと2匹の魚ばかりで満腹したと言うの
です！ そんなことって有り得ますか？…でも、イエス様は、そういった奇蹟をなさったのです！ 間違いなく、
聖書のみことばは、そう教えてくれています。だから、弟子たちは皆、このことに驚きを覚え…、ますます、
イエス様のお力というものに気付かされていくのです。皆さん、ご存知でした？ イエス様が、たくさん奇蹟を
行なった中で、十字架や復活は別として…、それが4つの福音書すべてに記されているのは、この、
「5000 人の給食」のエピソードだけなのです。

特に、ヨハネの福音書などは、他の3つの福音書よりも、数十年も後になってから書かれた福音書だ
ということもあって…、それらと比較・検証してみますと、明らかに、他の福音書との重複を避けて、イエ
ス様のなさったことを書き記しているような傾向を見て取ることができます。…にも関わらず、ヨハネは、こ
の出来事を、聖霊の導きもあって書き記しました。つまり、それほど、イエス様が、この時、5000 人もの
群衆のお腹を満たされた！ ということは、弟子たちにとっても、大きな驚きであったわけなのです。

●一部の聖書研究者たちの 間違った見解 とは？

このように、この聖書のみことばは、この奇蹟が、間違いなく、実際に起こった超自然な出来事であり
…、それと同時に、このことがイエス様によってなされた、素晴らしい御業であるという風に教えてしてく
れています。しかし、一部の聖書研究者たちの見解は、そうではありません。

実は、非常に著名な聖書研究者 (William Barclay) によって書かれたコメンタリーで…、私も持って
いた聖書注解書には、このように書かれておりました。「…ある人々は、これは起こるべくして起こったもの
だと考える。人々は空腹だった。が、彼らはひどく利己的だった。彼らはみな何か食べるものを携帯して
いたのだが、他の人に分けたくないばかりに、それを取り出すのをためらっていた。《12人》は、自分たちの
乏しいくわえを群衆の前に差し出した。すると、それに刺激されて、他の人々も自分たちの貧しい持ち
物を差し出し、とうとう、全員が食べても余るほどになった。そこでこの奇蹟は、利己的で猜疑心の強い
人々が度量の大きい人々に変えられた奇蹟、つまり、キリストに心動かされて人々が分かち合うようにな
ったという、いわば起こるべくして起こった奇蹟と考えられるのである。…」と書かれておりました。

もしも、万が一、このようなことが事実であったのなら…、果たして、12 弟子たちは、イエス様を真の神
様と信じて、そのイエス様のために、いのちを捨ててまで従っていくでしょうか？ もしも、今紹介したようなこ
とが真実で…、それ以外の聖書箇所もまた、同じように曲げられて理解されてしまうとすれば、一体何の
ために、イエス様は十字架にかかられたのでしょうか？ もしも、私たちが、聖書のみことばを、そのように、自分
の好き勝手に曲げて解釈できてしまうなら、残念ながら、もう、私たちは、聖書から確固たる教えを導き
出すことはできなくなってしまいます。それこそ、「あなたは、そう解釈するでしょうが、私は、こう考えて、こう
理解します…」というようになってしまっ…、せっかく、神様が私たちに与えてくださった必要なメッセージ
や警告などが、すべて無茶苦茶になってしまいます。だから、聖書の中には、『聖書の預言はみな、人の
私的解釈を施してはならない！』（Ⅱペテロ 1:20）とか、そのように、聖書のみことばを曲解する者たちは、
『自分自身に滅びを招いています…』（Ⅱペテロ 3:16）というような警告がなされているのです。私たちは、
聖書のみことばを出来得る限り、言葉通りに解釈して、理解していくことに努めなければなりません。…
イエス様は、この時、少しばかりのパンと魚をもって、5000 人もの腹を満たしてくださいましたのです！ それこそ

¹ ①マルコ 1:34、②マルコ 1:38、③マルコ 3:12

² 「ルカ福音書」ヨルダン社：パークレー著・柳生望訳 p.131

が、この聖書の正しい解釈であり、神様からのメッセージなのです。

Ⅲ・私たちが、神のメッセンジャーとなる！（随所）

最後に、時間のこともあるので、駆け足で、3つ目のポイントを見ていきましょう。イエス様が、この時、12弟子たちに期待しておられたことは、彼らが、神の“メッセンジャー”となる！ということだったと思います。イエス様が、この地上で語っておられたメッセージを、今度は弟子たちがイエス様に代わって、世の人たちに伝えていく！ということ…。そういったことを、イエス様は、間違いなく、弟子たちに期待しておられました。最後に、そのことを確認していきましょう！

●イエス様は弟子たちを、教え、そして、彼らを、用いられた！

ここ42節以降に書かれてありますように、『人々はみな、食べて満腹した。』、その後余った、『パン切れを十二のかごにいっぱい取り集め(た)』ということが書かれてあります。このことは、様々な書かれ方がしてある、4つの福音書すべてに、「余ったパン切れが12かごであった…」ということが共通して書かれてあります。恐らく、このみことばが教えようとしていることは、ただ単に、群衆が満腹してなお、それ以上のパンが有り余った…ということだけでなく、そのかごが12個であった！ということも、大切な要素なのだろうと思われまふ。…と言いますのは、皆さんも覚えてくださっているように、今回の、このエピソードは、彼ら弟子たちに与えられた“訓練”だったからです。

いえ、残ったかごが幾つであろうと…、イエス様が、この弟子たちに期待しておられたことは、彼らが、イエス様の教えを正しく理解して、そして、今度は、弟子たちが、神様のメッセンジャーとして、福音のメッセージを…、救いのメッセージを伝えていくことであつたのは間違いありません！…だって、そうでしょ？「訓練」というものは、その後、何か託したいこと…、目的があるからこそその「訓練」なのであって、何も期待しない…、何の目的も無い訓練というものは有り得ません！

例えば、皆さんは、こんなみことばをよーご存知だと思います。ヨハネ 6:35、『イエスは言われた。『わたしがいのかごのパンです。わたしに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者はどんなときにも、決して渴くことはありません。』』⇒この時に、パンと魚を食べて満腹した者たちであっても…、彼らは、すぐまた翌日になると空腹になりました。しかし、イエス・キリストという、“天からのまことのパン”をいただいた者は、もう決して、飢えることはありません。

それは、イエス様を信じた者が本当の満足というものを知って…、天の神様が常に、私たちに最善のことをなしてくださる！という確固たる約束が与えられているからです。私たちは、すべてを御存知で…、どんなことでも御出来になる真の神様を信じて、その神様からの助けをいただいて、残りの人生を歩いていくことができるのです！

●30節の『使徒』という名称と、その働き

どうぞ、皆さん、最後に、今回のみことばの冒頭部分…、30節をご覧ください。そこには、『さて、使徒たちは、イエスのもとに集まって来て、自分たちのしたこと、教えたことを残らずイエスに報告した。』とあります。実は、この福音書を記したマルコは、唯一、この個所でだけ、『使徒』という言葉(ἀπόστολος)を使っています。「使徒」と言いますのは、その昔は、「遠征隊、艦隊…」の意味で使われたそうです。しかし、この当時、この言葉は…、一般的には、「遣わした者の権威と委ねられた使命をもって派遣された人、全権大使…」という感じで使われていたそうです。

皆さん、それがどういう意味か分かってくださいますか？…つまり、使徒として派遣された者は、その人たちを遣わした者の“代わり”であつて…、遣わした者と同等の権利 & 権限があつて、その遣わした者と同

様に扱われる権利があつたのです。…つまり、イエス様は、ご自分が、この地上から居なくなった後、その使徒たちが、自分になり代わって、神の福音を…、救いのメッセージを宣べ伝えることを望んでおられたのです！実際、彼ら12人の使徒たちは、特に、あのペンテコステ以降、イエス様の十字架や復活による救いのメッセージを大胆に宣べ伝えていったわけですよ！

確かに、皆さんがご存知のように、今、使徒と呼ばれるべき人物はおりません。…と言いますのは、使徒 1:22 を見てみますと、使徒という職に就くためには、『…イエスの復活の証人とならなければなりません。』ということが教えられてあるからです。…ですから、もしも今の時代に、このような「使徒」という役職の人たちが、教会にいるなら…、残念ながら、それは聖書的ではない！と言わざるを得ません。

<励ましの言葉>

しかし、今の時代…、私たちは、I コリント 12章のみことばが教えてくれているように、教会全体が、1人の「キリストのからだ」として、キリストを“かしら”として…、キリストが歩まれたように、この地上にあつても、歩まなければなりません。そういった意味においては、今、私たち一人ひとりが、キリストの証し人として…、救いのメッセージを語っていかなくてはいけないのです。果たして、私たちは、イエス様の期待された通り、あるいは、イエス様の望み通り、イエス様の証しをしつつ…、この地上での働きを全うしていると言い得るでしょうか？

と同時に、この5000人の給食が起こつた当時、その12人の中には、あの裏切り者であるイスカリオテがおりました。彼は、一体、何のために存在し…、あるいは、12弟子、12使徒の中に居たのでしょうか？…果たして、イエス様は、イスカリオテが救われていないことや、最後に裏切るであろうことをご存知なかったのでしょうか？

⇒いいえ！もちろん、イエス様は、イスカリオテが裏切ることをご存知でありました。だから、イエス様は、後で、弟子たちがそれと分かるようなメッセージを幾つか発しておられたのです。じゃあ、どうして、イエス様は、イスカリオテのことを、そのまましておかれたのでしょうか？…それを、私は、弟子たちや現代の私たちクリスチャンに対する“教訓”だと思っています。

…と言いますのは、イエス様だけでなく…、多くの弟子たちもまた、「私たちの周りには、本当に救われた者たちと、一見、救われたように“見えて”、実は救われていない者たちが居る！」ということ、何度も、何度も繰り返して教えてくれているからです。…だから、どうか、皆さん。ぜひ、考えてみてください！「本当に、まず、私は救われているだろうか？本当に、私は、イエス様が歩まれたように歩みたいと思つているだろうか？私は、自分の心を尽くして、力を尽くして、思いを尽くして、イエス様を愛して、そのイエス様に従つていこうとしているだろうか？」…と…と言いますのは、Iヨハネ書のみことばが教えてくれているのは、私たちの神様に対する愛こそが、私たちが本当に救われた証拠…、私たちが神様によって変えられた証拠であるからです。

よく言われることですが、この5000人の給食の時、ヨハネ伝 6章の平行記事を見てみますと、その時、イエス様に、5つのパンと2匹の魚を差し出したのは、1人の少年であつたことが分かります。少年が差し出した、大麦のパンと言うのは、どちらかと言うと、粗末なパンのことで、決して、高級な食べ物というわけではありません。しかし、そんなちっぽけなお弁当を、ヨハネ伝では、イエス様が『感謝をささげて』、それを群衆に配られた！と教えられてあります。

イエス様は、皆さんが捧げられるどんな捧げ物でも喜んでくださいます！もしも、そこに皆さんの信仰や、お気持ちが入められているなら…、大事なものは、金額や価値ではありません。皆さんの神様を想う“愛”です！…どうか、天の神様を想い…、神様が喜んでくださるような歩みを、今週1週間も…、いえ、私たちが天に召される、その時まで歩いていってくださることをお勧めいたします。最後に、お祈りをもって～